

## 平成25年度総合文化研究所研究助成「日本・東洋美術史に関する多言語教育の基盤整備」に関する報告

山本聡美

### はじめに

日本国内で日本・東洋美術史の教育を実施する場合、一般的に日本語が用いられ、教材や文献も日本語のものに偏りがちである。しかしながら、19世紀以降蓄積された研究成果は、当然ながら日本語に限られたものではない。東洋美術史に関していえば、中国語や韓国語による蓄積があることは言うまでもないが、加えて欧米の研究者による日本・東洋美術史研究の歴史は長く、水準も高い。教育の場において、これらを十分に活用することによって多言語教育の可能性が広がる。そしてこのことは、共立女子大学で学ぶ大多数である日本人学生にとって、自国やアジアの文化を客観的に俯瞰する視点を獲得することにもつながる。また、本学では、継続的に海外からの留学生を受け入れており、彼らの日本・東洋文化への関心は極めて高い。多言語教育の基盤を整えることで、留学生を対象とした講義内容も拡充可能となる。

このような観点から本研究課題では、日本・東洋美術史教育に不可欠な重要作品を中心に、教材用のデジタル画像を集積し、これに連動した日・英・仏を中心とする文献目録の作成に取り組んだ。また、関連する調査・研究会・講義の実践を通じて、多言語教育の方法を具体的に検討した。研究代表者として山本聡美（本学文芸学部教授）が全体を統括し、研究分担者として、エリカ・ペシャル＝エルリー（本学国際学部教授）、松尾依子（本学文芸学部助手）、米倉迪夫（東京文化財研究所名誉研究員）、中村節子（東京文化財研究所企画情報部資料閲覧室、元司書）の協力を得た。その他の協力者に関しては各項目で触れる。

以下では、本助成金による研究期間（2013年度）の成果について、その概略を報告する。また本稿に続けて、研究協力者による成果報告5本を併せて掲載した。

### 1 教材となる画像の収集とデジタル化

山本、ペシャル、米倉がこれまでの研究・教育活動を通じて蓄積してきた35mmポジフィルムのデジタルデータ化に着手した。約1万5千枚のポジフィルムのうち、2013年度中に3分の1にあたる約5千枚のデジタル化が完了した。なお2014年度以降は、科学研究費補助金・基盤研究(C)「日本中世における寺社縁起絵と仏教説話画の図像交流」（研究代表者：山本聡美）にて作業を継続している。

平成 25 年度総合文化研究所研究助成「日本・東洋美術史に関する多言語教育の基盤整備」に関する報告

## 2 講演会・研究会の開催

2013 年 6 月 9 日に、清水義明氏（米国・プリンストン大学名誉教授）を本学に招き、米国における日本美術受容に関する講演を実施した。また同日、「後白河院と絵巻研究会」*Visualizing Stories of Heian Japan: Go-Shirakawa-in's Image Repository* の共通テーマを掲げ、日・米の研究者 5 名による、院政期絵巻についての研究発表を実施した。なお、この講演会と研究会は、科学研究費補助金・基盤研究（A）「大画面説話画の総合研究」（研究代表者：佐野みどり）との共同開催として実施し、当日は 100 名以上の参加者を得て活発な質疑応答が行われた。講演及び発表内容は以下のとおり。

[講演]

清水義明「核と美術：平山郁夫とベン・シャーン、二人の画家による反応」*Nuclear Disaster in the Pacific and Art: Response by Two Painters, Hirayama Ikuo, and Ben Shahn.*

[研究発表]

山本聡美（共立女子大学文芸学部教授）「仏教説話としての「伴大納言絵巻」」*The Ban Dainagon emaki as a Buddhist Parable.*

永井久美子（東京大学大学院総合文化研究科特任講師）「蓮華王院宝蔵絵巻コレクションにおけるグロテスクモチーフの遍在」*The Circulation of Grotesque Motifs in the Rengeōin Handscrolls.*

レイチェル・サンダース（Rachel Saunders, 米国・ハーバード大学東洋学部博士課程）「場のポートレート：異国のイメージと「吉備大臣入唐絵巻」」*Portrait of a Place: Imagery of the Exotic and Minister Kibi's Adventures in China.*

龍澤彩（金城学院大学文学部准教授）「神話の所有：「彦火々出見尊絵巻」に見る「異界」表現」*Mastering Visions of Borderlands: Claiming Sovereignty through Myth.*

クリストファー・カージー（Kristopher Kersey, 米国・カリフォルニア大学バークレイ校美術史学部博士課程）「後白河院と「目無経」の経文：匿名性の問題について」*Go-Shirakawa-in's Ultimate Handscroll: Problems Surrounding the Inscription of the Eyeless Sutra.*

## 3 文献調査

2013 年 8 月 25 日～9 月 2 日及び 12 月 20 日～2014 年 1 月 14 日にかけて、ペシャールが、ギメ美術館・フランス国立図書館・ルーブル美術館にて、日本・東洋美術に関する文献の収集とフランス語による日本・東洋美術史関連図書の購入を行った。

また、2013 年 8 月 25 日～9 月 2 日にかけて山本、松尾の両名は、科学研究費補助金・基盤研究（C）「日本中世における寺社縁起絵と仏教説話画の図像交流」(研究代表者：山本聡美)による研究として、ギメ美術館・フランス国立図書館にて調査を行った。この間ペシャール氏と協働することで、双方の調査・資料集を円滑に行うことができた。特にフランス国立図書館にて、17 世紀初頭の日本で

制作された奈良絵本である「すみよし縁起」などの貴重書を閲覧し、その成果が下記4)の教育プログラムにも結びついた。

なお本誌には、ペシャールへのインタビュー記事を掲載した。松尾が聞き手をつとめ、日本・東洋美術史を外国人の立場で学び、研究と教育に従事してきた経験が多角的な視点で語られている。

#### 4 教育プログラムの実践

2013年10月～12月にかけて、スイス・チューリヒ大学東洋美術史学科教授のハンス・トムセン氏との協働で、同大学にて日本の絵巻とくずし字に関する講義を行った。全15回講義のうち5回を、スカイプを用いたe-learning形式の講義として山本が担当した。画像資料の提示に関しては、チューリヒ大学とウェブデザイナーのクリストフ・フォン・ヴァルトキルヒ氏 (Von Waldkirch PR&NEW MEDIA 代表) との共同開発になる、「Zlide システム (インターネットを経由した、複数のコンピュータによる画像シンクロシステム)」を利用した。講義のコンテンツとして、先述1)でデジタル化した画像、3)にて調査したフランス国立図書館蔵「すみよし縁起」関連資料を使用し、日本側とスイス側で同時にPPT画像と音声を視聴しながら講義を円滑に進めることができた。

なおこの講義の受講生から2名が、本誌に論文を寄稿してくれた。ルカス・マルティ氏 (Lukas Marti, チューリヒ大学日本学専攻) は、フランス国立図書館蔵「すみよし縁起」詞書の翻刻・釈文・英訳に取り組んだ。同氏は、現代日本語はもとより古文やくずし字にも習熟しており、美術史を含め日本の古典文化を研究する高い能力を備えている。日本語・英語・ドイツ語で文献を読み、学術的な討論のできる同氏の存在が、今回の教育プログラムにおいて大きな推進力となった。

また、ヨナス・ルエグ氏 (Jonas Rüegg, チューリヒ大学日本学専攻, 2014年9月よりハーバード大学大学院東洋学部修士課程) の論考では、本研究課題である「日本・東洋美術史に関する多言語教育の基盤整備」を踏まえ、19世紀ヨーロッパにおける日本学を牽引した先駆者たちの業績に着目。ここで取り上げられている日本・東洋学者のうち、エメ・アンベール (Aimé Humbert, 1819 - 1900) は、スイス連邦の特命全権公使として幕末の日本に滞在した人物である。1863年4月に来日し翌年2月には日本とスイスの修好通商条約締結を成功させるいっぽうで、約10か月の滞在期間中に写真や文献など日本文化に関する資料収集も精力的に行った。これらの資料を活用して、帰国後 *Le Japon illustré* (『幕末日本図絵』, Librairie de la Hachette et Cie, Paris, 1970) を出版するなど、黎明期の日本研究に貴重な基礎資料を提供した。2014年は日本とスイスの国交150周年を記念する行事が、両国で多数開催されたが、このような文化交流の歴史もまた150年の蓄積があるのである。

ルエグ氏の論考でも着目するように、19世紀以降、国内外で外国語による日本美術関連書籍や学術雑誌の出版が活発化した。主要な文献に関する書誌や出版背景に関する報告書を本誌に掲載した。執筆は、本研究分担者の中村節子が担当した。同報告書では、インターネットを通じて画像や文献の情報が広く共有される現在の状況にも触れ、情報発信の多言語化は今後ますます重要度を増すとの見通しを示す。東京文化財研究所資料閲覧室司書として、長年にわたって国内外の研究者の

平成 25 年度総合文化研究所研究助成「日本・東洋美術史に関する多言語教育の基盤整備」に関する報告  
文献調査を支えてきた同氏は、本学文芸学部卒業生でもある。

以上に加え、本学においても「在外美術」をテーマにしたゼミを行い、齋藤緋紗依氏（2014 年 3 月本学文芸学部卒業）が、アイルランド・チェスタービーティ図書館所蔵「竹取物語絵巻」に関する卒業論文に取り組んだ。その成果に基づく本誌掲載の論考では、国内外に所蔵される「竹取物語絵巻」諸本との比較を通じて、同図書館本の図像や構図上の特徴を明らかにする。

なお、在外美術をゼミのテーマにするに際して用いた資料の一部は、2012 年 9 月 9 日～19 日にかけて、科学研究費補助金・若手研究（B）「教説絵巻の基礎的研究」の一環として、山本がチェスタービーティ図書館で行った絵巻調査を通じて収集したものである。いっぽう学内に目を向けると、本学図書館においても 17 世紀初頭の制作と見られる「竹取物語絵巻」の優品が貴重書として所蔵されている。在外美術品に関する研究や教育を通じて、このような身近な作品の重要性を、学生たちが再認識することにもつなげていきたい。

## 5 公開講座

2013 年 12 月 19 日、総合文化研究所主催の公開講座として、文芸評論家の田中弥生氏による講演を行った。同氏は、本谷有希子ら 6 人の女性小説家を取り上げた『スリリングな女たち』（講談社、2012 年）で現代文学批評に新機軸をもたらした。本学における講座では「イメージ記譜としての文学——流れる風景を記録する」との論題で、日本文学や外国文学における、絵画作品からのイメージの引用や、そこから喚起されるメタファーについて具体例をあげながら講じた。公開講座の開催に際しては、本学文芸学部教授の沼田知加の協力を得、同氏が担当する「翻訳概論」（文芸学部専門基礎科目）履修学生の参加も実現した。なお当日の講演内容に関して、その一部を本誌に掲載するとともに、主要部分については、『すばる』（2015 年 2 月号、集英社）に「『三四郎』の富士」として掲載されている。

## 6 日米学生の国際交流プログラムへ参加

2014 年 3 月 17 日～19 日にかけて、沖縄県で開催された、沖縄近現代史・文化史に関する国際交流プログラムに共立女子大学学生 1 名とともに参加した。これは、米国・コネティカット大学の授業の一環として実施された教育プログラムである。同大学講師の渡辺健氏が 20 名ほどの学生を引率し、3 月 9 日～20 日にかけて県内各地でフィールドワークを行う内容で、我々はその一部に参加した。

3 月 17 日には、沖縄県立芸術大学准教授の喜屋武盛也氏の協力を得て同大キャンパスで国際交流会が開催された。同大教授のアントニー・フィリップ・ジェンキンズ氏による近現代沖縄史に関する講義、同大学音楽学部在学学生による琉球芸能実演の後、参加者同士の意見交換の場が用意された。教員同士が、米国における日本研究の論点や方法論に関する討議を行ういっぽうで、日米の参加学生同士の交流も、日本語・英語を交えて活気あふれるものであった。翌 18 日は糸満市に移動し、ひめゆり平和祈念資料館を見学。展示見学に加え、元ひめゆり学徒であった與那覇百子氏の講話を、

米国の学生のために渡辺氏の通訳を交えて聴講する。コネティカット大学の参加者に米国外からの留学生も含まれるなど、参加学生の国籍やそれにとりもなう歴史的な背景が多様であったにも関わらず、沖縄戦の犠牲者に対する深い同情を共有することができたのは、若い世代の学生たちにとって得難い経験であったように思う。最終日の19日は、沖縄県立美術館・博物館、那覇市壺屋焼物博物館などの文化施設を見学。

このプログラムに参加したコネティカット大学の学生たちは、1月～2月にかけて13回の講義を受講して沖縄史に関する知識を蓄えた。その上で、3月下旬に10日間の現地フィールドワーク、帰国後の4月～5月にかけてさらに14回の授業時間を使って、講義、口頭発表、レポートの作成などに取り組んだ模様である。学生にとっても、高いレベルでの努力を必要とする講義内容であるが、何よりもこれをコーディネートする渡辺氏の教育方法に学ぶところが大きかった。なお実施にあたっては、国際交流基金(The Japan Foundation) Japan-America Collegiate Exchange Travel Programの助成によって沖縄への旅費や必要経費を賄い、履修学生の経済的負担を軽減したとのことであった。

## おわりに

以上の取り組みを通じ、日本・東洋美術史に関する多様な言語で蓄積された成果を知ることは、研究・教育両面において大変有意義であった。特に、チューリヒ大学やコネティカット大学で実際に行われている教育プログラムに参加することで、海外で日本学に関する教育を行う上での工夫や留意点についての知見を深めることができた。

本学においても、例えば英語による日本美術史の講義やワークショップを実現することができれば、留学生だけでなく、日本人の学生にとって大きな教育効果を得ることができるであろう。また、本学所蔵の貴重書や染織品の研究成果なども加えながら、e-learning講義を展開することで、国内外へ広く情報発信するシステムの構築にもつながる。本研究課題を通じて得た以上のような発想や知見を、実際の教育プログラムとして具現化していくことが今後の課題である。

なお、2014年9月から、チューリヒ大学日本学専攻の学生であるアンナ・ワルター(Anna Walter)氏が本学に科目等履修生として在学している。4)で述べたe-learning授業を通じて本学に興味を抱き、留学を実現させた。遠隔授業は、それだけで終わるのであればやはり物足りない。美術史を含む文化や歴史の学びには、現地へ自ら足を運ぶ経験が、どのような時代にあっても不可欠である。最終的には自発的で行動的な学びへといざなう窓口としての、多言語教育プログラムを模索していきたいと考えている。